

○基本計画の名称：日南市中心市街地活性化基本計画

○作成主体：宮崎県日南市

○計画期間：平成24年12月～平成29年3月

1. 中心市街地の活性化に関する基本的な方針

[1] 日南市の概要

(1) 位置・地勢・気候

平成21年3月30日に旧日南市、旧北郷町及び旧南郷町の3市町が合併して新しく誕生した本市は宮崎県の南部、宮崎市の中心部から南に約52kmに位置し、北は宮崎市、西は三股町及び都城市、南は串間市に接する県南の拠点都市である。

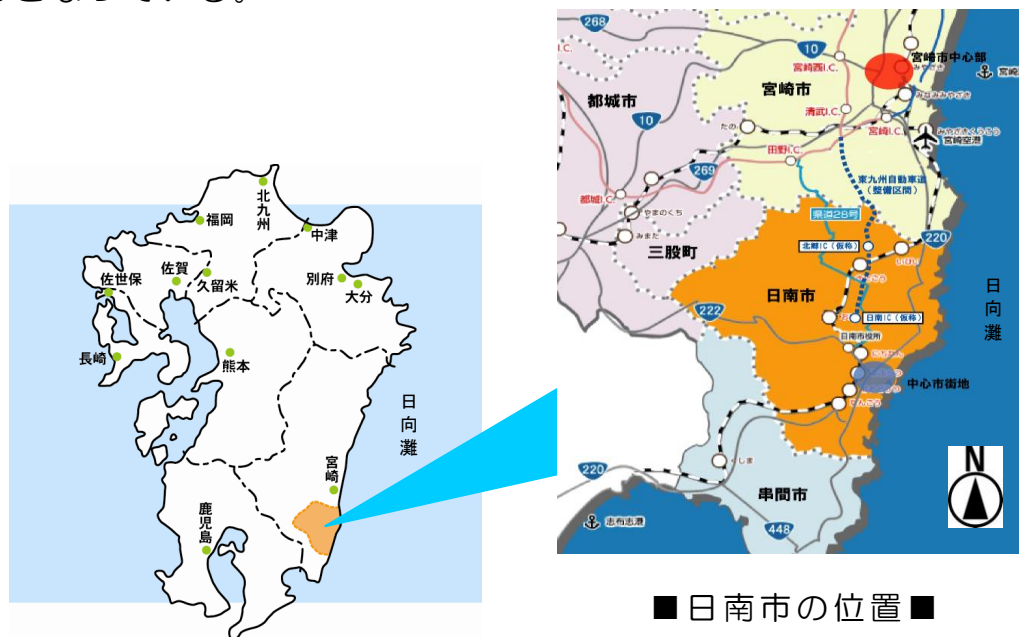
本市の東部は日向灘に面し、「日南海岸国定公園」に指定されている海岸線が続き、北部から北西部にかけては標高1,000m級の小松山や男鈴山等の山々に囲まれている。

本市の面積は536.12km²で、そのうち林野面積が占める割合は約78%となっており、そのほとんどは^{おび}鉄肥杉の人工林で占められている。可住地面積は約22%となっており、可住地面積に占める耕地面積の割合は24.4%となっている。

気候は、平均気温が18.7度、平野部における一年の日照時間が平均2,200時間以上と多く、温暖多照で、南海型気候区に属する高知県・紀伊半島南部などとともに、日本で最も日照に恵まれた地域の一つである。

特に冬季の日照時間は大変長く、冬型気圧配置で山沿いが曇っていても、平野部は、晴れている場合が多く、冬でも積雪はほとんどない。

一方で北部から北西部に山々が広がる本市は、降水量が年間 3,000 mm を超える多雨地域で、四国の太平洋岸、紀伊半島の東部とともに日本の最多雨地帯となっている。



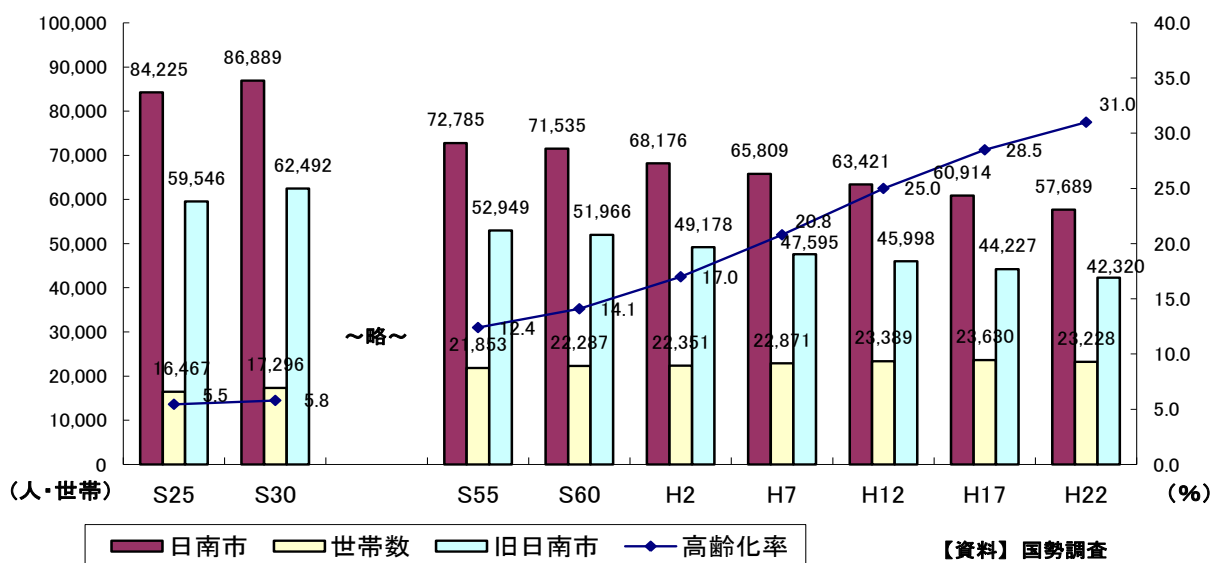
(2) 人口動態

1) 日南市の人口、世帯数、高齢化率の推移

本市の人口は、昭和 30 年の 86,889 人（旧日南市においても同年の 62,492 人）をピークに減少傾向が続いており、平成 17 年から平成 22 年までの 5 年間で約 5.3%の 3,225 人が減少し、平成 22 年の人口は 57,689 人となっている。世帯数は、昭和 55 年以降平成 17 年までの間は増加傾向にあったが、平成 17 年から平成 22 年までの 5 年間で、約 1.7%の 402 世帯が減少している。

高齢化率は、平成 7 年には 20%台に突入し、平成 17 年には 30%台に迫り、平成 22 年には、31.0%と 30%を超えている。

■日南市の人口、世帯数、高齢化率の推移■



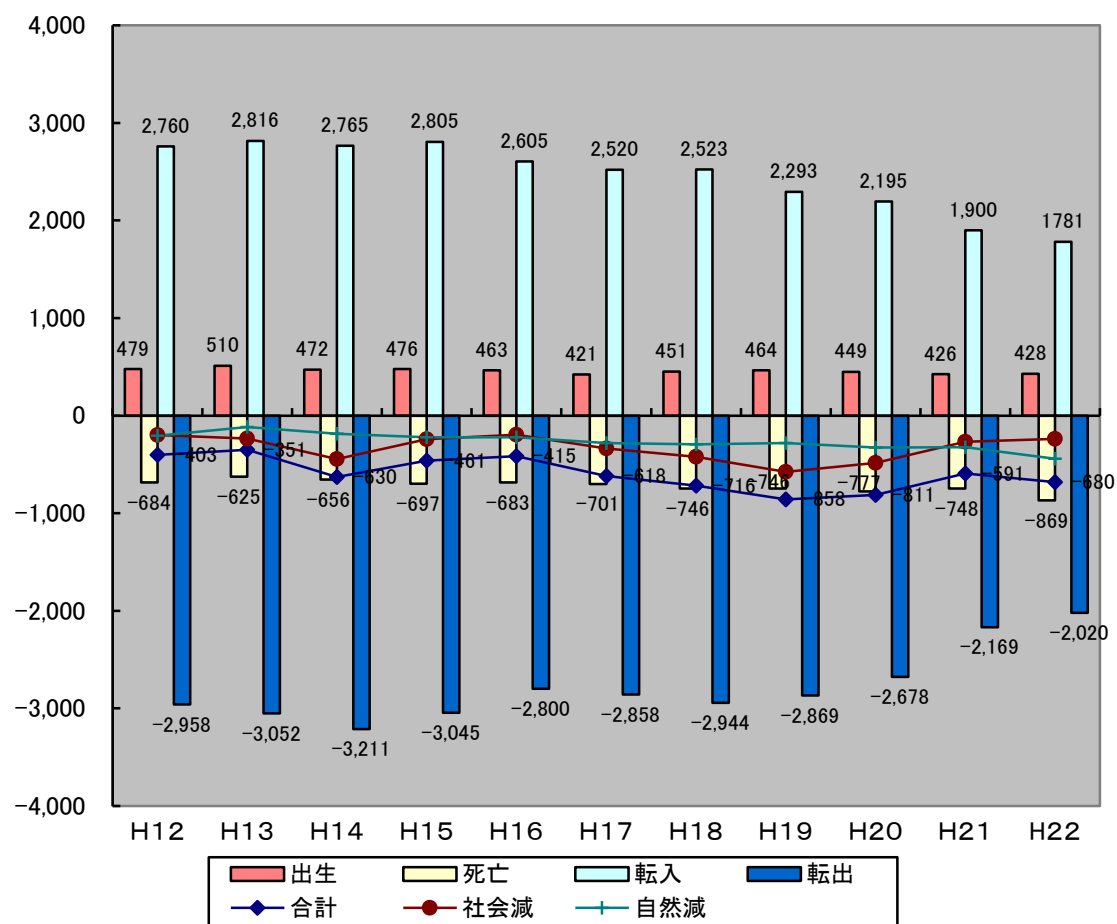
注)「高齢化率」は、人口に占める 65 歳以上の人口の割合を示す。

2) 自然動態と社会動態

本市の平成 22 年度の人口動態は、出生 428 人、死亡 869 人で 441 人の自然減、転入 1,781 人、転出 2,020 人で 239 人の社会減、合計で 680 人の人口減少となっており、人口減少のうち 64.9%が自然減によるものとなっている。

平成 12 年以降の人口動態の推移を見ると、毎年人口は減少しており、自然動態による減少数が社会動態による減少数を超えた年は、平成 12 年などの 4 箇年だけで、それ以外の年は社会減による減少が多いことから、本市の人口減少は、社会動態によるものが大きい、ここ 2 年は自然動態による減少が大きい。

■人口動態の推移■



	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22
出生	479	510	472	476	463	421	451	464	449	426	428
死亡	-684	-625	-656	-697	-683	-701	-746	-746	-777	-748	-869
自然増減	-205	-115	-184	-221	-220	-280	-295	-282	-328	-322	-441
転入	2,760	2,816	2,765	2,805	2,605	2,520	2,523	2,293	2,195	1,900	1,781
転出	-2,958	-3,052	-3,211	-3,045	-2,800	-2,858	-2,944	-2,869	-2,678	-2,169	-2,020
社会増減	-198	-236	-446	-240	-195	-338	-421	-576	-483	-269	-239
増減計	-403	-351	-630	-461	-415	-618	-716	-858	-811	-591	-680

【資料】日南市推計人口

3) 昼間人口と夜間人口（国勢調査）

本市の平成 22 年の昼間人口は、57,430 人、夜間人口 57,689 人で、昼間対夜間人口比が 99.6%と若干流出傾向にある。同様に、平成 17 年、平成 12 年及び平成 7 年についても、流出傾向にあった。

なお、旧南郷町の昼間対夜間人口比が著しく低いのは、マグロ延縄やカツオー本釣り等、長期に渡って漁業に従事している者が多いことがその要因となっている。

■ 昼間人口及び昼夜間人口比率の推移 ■

		昼間人口(人)	夜間人口(人)	昼間対夜間人口比(%)
平成7年	日南市	65,557	65,809	99.6
	旧日南市	48,568	47,595	102.0
	旧北郷町	5,518	5,598	98.6
	旧南郷町	11,471	12,616	90.9
平成12年	日南市	63,075	63,419	99.5
	旧日南市	46,963	45,996	102.1
	旧北郷町	5,296	5,359	98.8
	旧南郷町	10,816	12,064	89.7
平成17年	日南市	60,369	60,912	99.1
	旧日南市	44,913	44,225	101.6
	旧北郷町	5,104	5,073	100.6
	旧南郷町	10,352	11,614	89.1
平成22年	日南市	57,430	57,689	99.6

【資料】国勢調査

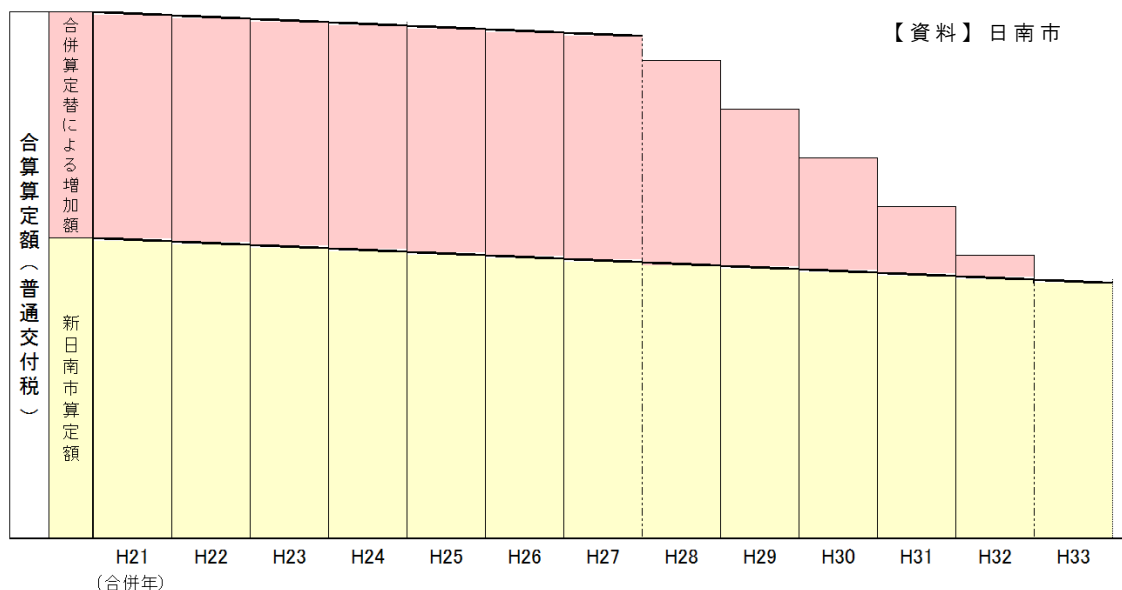
※H7～H17の夜間人口は年齢不詳を除外しているため、確定人口と一致しない。

(3) 財政状況（普通交付税）

平成 21 年 3 月 30 日に合併した本市は、「市町村の合併の特例に関する法律」に基づき、合併後 7 年間（平成 21 年度～平成 27 年度）は、3 市町それぞれが合併しなかったものとして算出された交付税措置を受けている。

しかしながら、その後 5 年間（平成 28 年度～平成 32 年度）で段階的に削減され、平成 33 年度からは本来の交付税額となることから、非常に厳しい財政運営を強いられることとなる。

■ 普通交付税額の推移イメージ ■



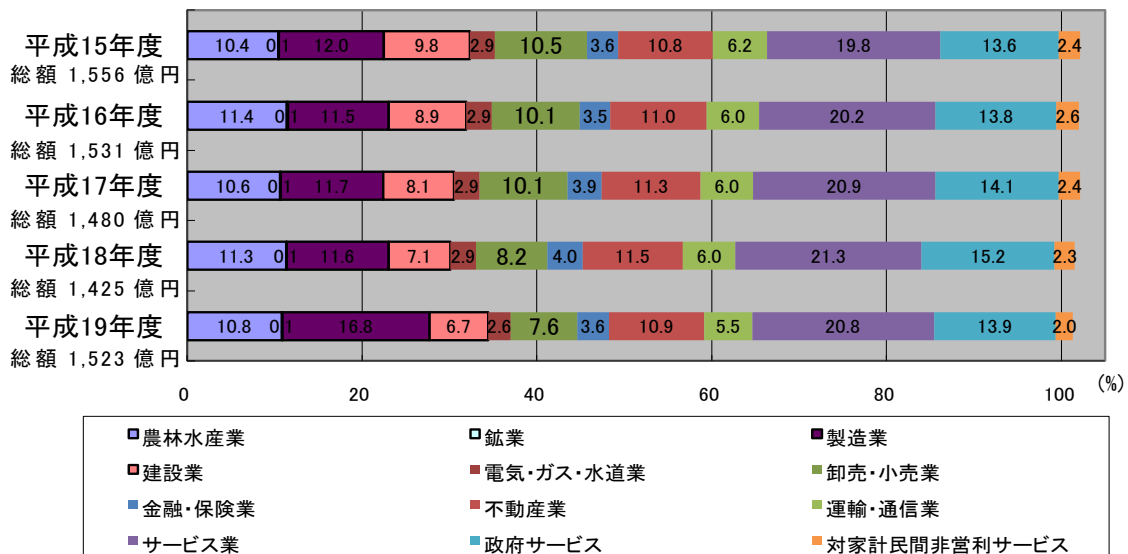
(4) 産業

1) 産業構成比

本市では、サービス業、製造業、政府サービス、農林水産業の順でシェアが高く、中でも製造業はシェアを伸ばしている。

また、建設業、卸売・小売業はシェアを落としている。

■産業構成比の推移■



【資料】平成19年度宮崎県の市町村民所得 ※ 帰属利子を含むため、構成比は100%を超える。

2) 農林水産業

本市は、豊かな海、山、更には温暖な気候といった地域特性を有していることから、農林水産業は盛んで、全産業に占める農林水産業の割合は、毎年増減はあるものの、約 1 割を維持している。

農業は、温暖な気候と豊富な日照量を活用した早期水稻や極早生温州みかん、中晩柑類、完熟マンゴー、日本一の生産高を誇るスイートピーなどを盛んに栽培している。また、農業生産額の半分以上を占める畜産業については、「みやざき地頭鶏」の普及にも力を入れるなど、平成 20 年度農業総生産額は約 167 億円、耕地面積は 1,938ha となっている。

林業は、市域面積の 78.0% (42,232 ha) が林野となっており、そのうち約 7 割 (30,641 ha) を餌肥杉の人工林が占めている。餌肥杉は、「油分が多く、曲げやすく、衝撃に強い」という特性から、江戸時代から造船用材として需要が高かったが、船体が木造から鉄鋼・FRP へ移行した昭和 30 年代から需要は減少しており、近年では、建築用材やインテリア家具材として普及を図り、平成 19 年度の生産額（市町村内総生産）は約 5.8 億円となっている。

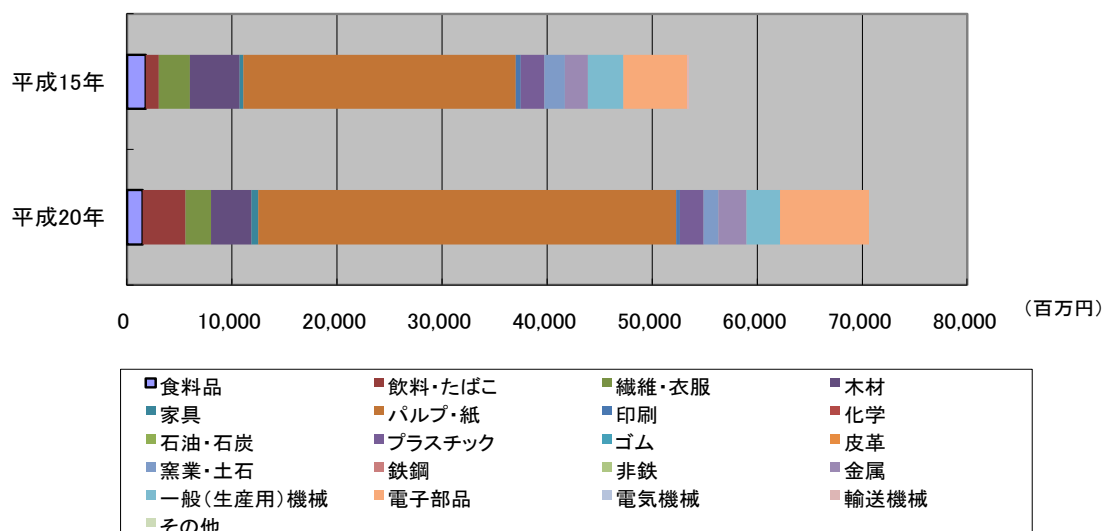
水産業は、市内に 10 港もの良好な港を有し、平成 20 年度の水揚げ高は、県内トップの約 142 億円となっている。そのうち、まぐろ延縄と近海かつお一本釣による生産額が約 133 億円と、全体の 9 割超を占めている。しかし、世界的な漁業規制や水産資源の減少により、平成 16 年度水揚げ高の約 167 億円と比較すると、金額で 25 億円、率で 15% 減少している。

3) 製造業

本市は、昭和 13 年に㈱日本パルプ工業餌肥工場（現在の王子製紙㈱日南工場）が操業を開始し、以後、企業誘致を進める中で、飲料、繊維・衣服、プラスチック、電子部品等の企業が立地するようになった。

既存事業所の拡張等により、パルプ・紙、電子部品の出荷額が伸びており、平成 20 年における製造品出荷額は約 706 億円で、そのうちパルプ・紙の出荷額は約 398 億円と、平成 15 年の約 260 億円と比較して約 53.1%、電子部品の出荷額は約 85 億円で平成 15 年の約 61 億円と比較して 39.3%と、大きく伸びている。

■製造品出荷額等（従業員4人以上）の推移■



【資料】工業統計調査

4) 商業

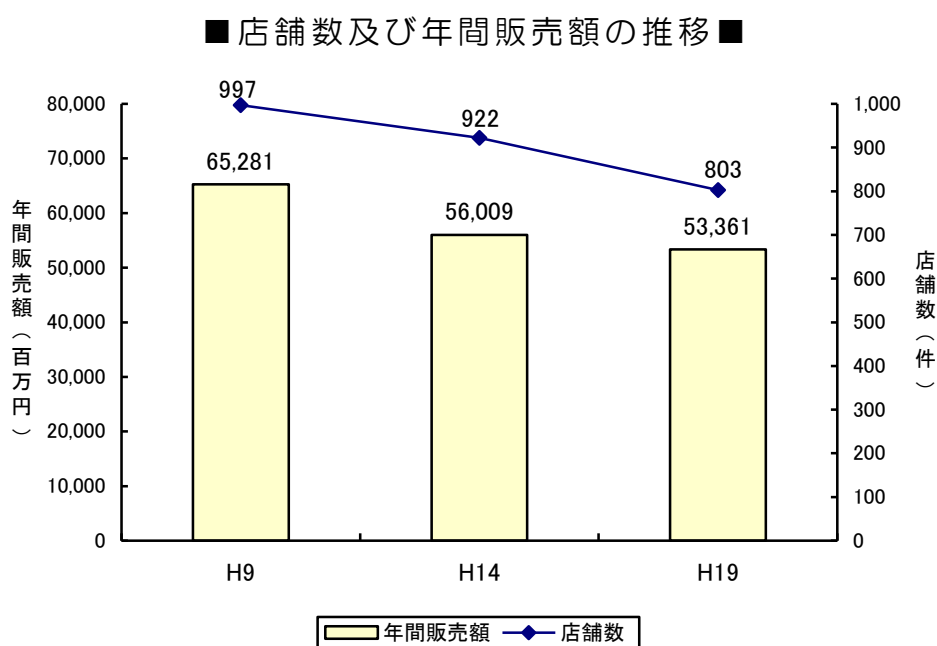
本市の小売業における、平成 9 年から平成 19 年の推移は、店舗数が 997 件から 803 件と、194 件(19.5%)減少し、年間販売額は、65,281 百万円から 53,361 百万円と、11,920 百万円(18.3%)減少している。

平成 10 年 7 月に、中心市街地の商店街に立地していた大型スーパー「マルショク」が撤退し、更に平成 14 年には、中心市街地に立地する県南地域最大の大型商業施設である日南ショッピングセンターサピア（以下「サピア」という。）に出店していた「寿屋」が、民事再生法の適用を申請し、退店したことで、中心市街地商店街への来街者の減少に拍車をかけた。

平成 9 年及び 19 年の商業統計調査及び宮崎県推計人口から見る、県民人口一人あたりの年間小売販売額を 100%とした場合、本市は、平成 9 年の 96.46%から平成 19 年には 89.37%と、7.09 ポイント減少している。

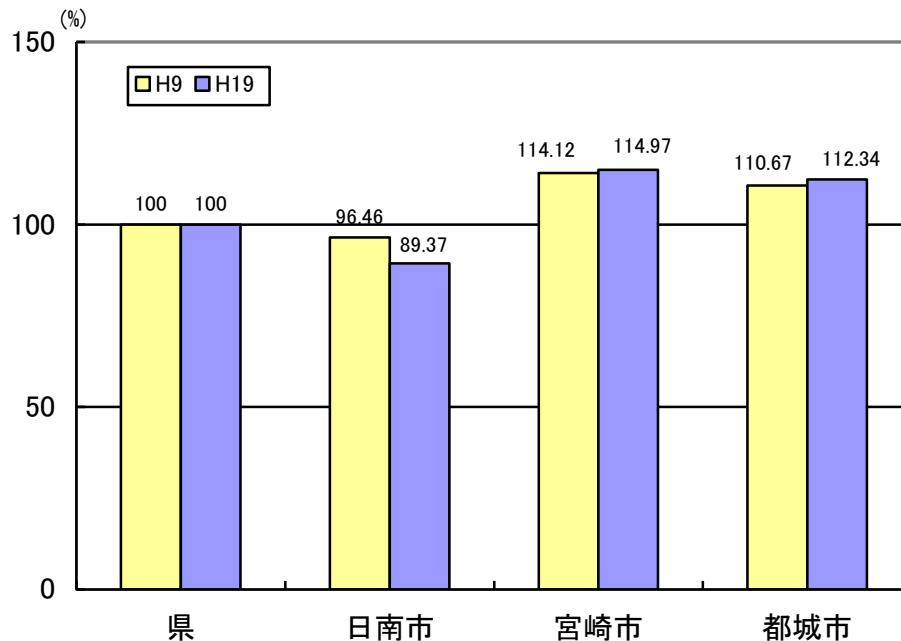
これに対し、近隣の宮崎市は 0.85 ポイント、都城市は 1.67 ポイントそれぞれ上昇していることから、消費購買力が近隣都市へ流出していることが考えられ、平成 15 年 3 月に都城市、平成 17 年 5 月に宮崎市にイオン系の超大型商業施設が立地したことが影響していると思われる。

市内においては、平成 15 年 10 月に、地価の安い吾田地区に日南ショッピングタウンが立地し、その後、その周辺に郊外型店舗が相次いで立地するなど、新たな商業集積地が形成されている。



【資料】商業統計

■ 人口一人あたりの年間販売額 ■



【資料】商業統計及び宮崎県推計人口

※日南市、宮崎市及び都城市のデータは、合併前の市町データの合計値

※各市の値は、県の数値を100とした場合の値

(5) 交通体系

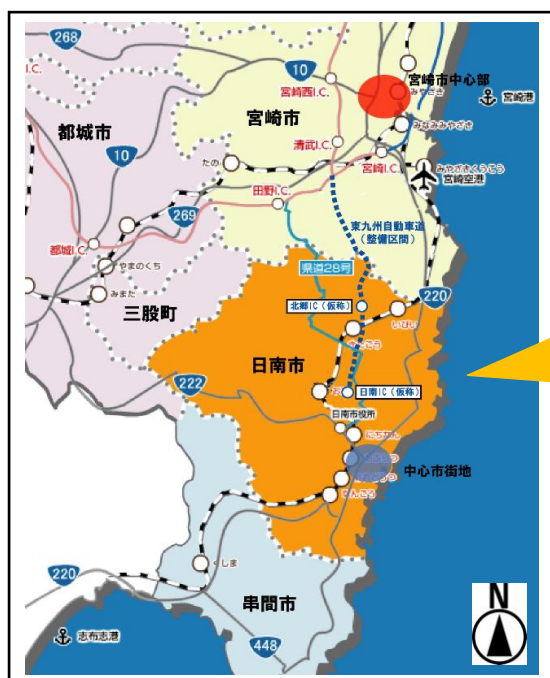
本市の道路網は、南北に縦断する国道220号と国道448号及び東西へ走る国道222号を動脈とし、県道日南高岡線等の主要幹線道路とこれらに連結する主要地方道6路線、一般県道16路線、広域農道等が縦横に配置されている。

平成8年度に、東九州自動車道清武～北郷間（延長19km）の整備計画が決定され、現在は、新直轄方式(国)による整備が進められており、平成19年には北郷～日南間が着工、平成28年度以降に清武～日南間が開通する予定である。

現在、宮崎市の中心部まで、車で約1時間の距離であるが、同区間が開通すると、約40分の距離となる。鉄道は、南宮崎駅（宮崎市）～志布志駅（鹿児島県志布志市）間を結ぶJR日南線があり、南宮崎駅から日南駅までは、約1時間10分で結ばれている。

海上交通としては、油津港東地区に水深10mと12mの大型岸壁が平成10年に供用開始されたことから、45,000トン級の大型チップ船、油津港と大阪、東京方面を結ぶ定期RORO船が就航し、また、日韓定期コンテナ航路や神戸内航フィーダー航路も開設されている。更に、「飛鳥Ⅱ」など豪華客船の寄港地ともなっている。

■ 交通体系（南九州：主要道路・高速道路・鉄道） ■



(6) 観光資源

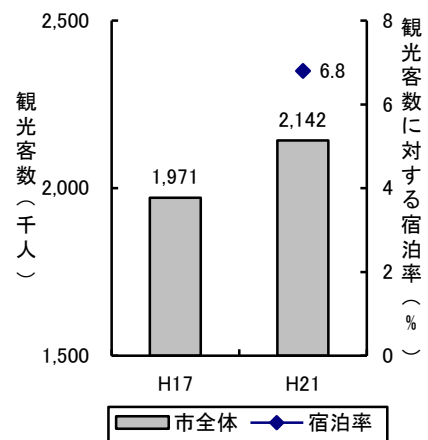
1) 観光動態

日南市への観光客数は、平成 17 年の 1,971 千人から平成 21 年 2,142 千人と、5 年間で 171 千人、8.7%の増となっている。平成 21 年の観光客数のうち、市内の宿泊施設利用者は 146 千人、観光客数に占める割合は約 7%となっており、日帰り（通過型）の観光客が多い。

平成 21 年の月別観光客数を見ると、1 月が約 38 万人と一番多く、そのうち鵜戸神宮を訪れる初詣客が約 27 万人を占めている。一方、一番少ないのは梅雨で雨の多い 6 月で、約 11 万 8 千人となっている。

また、本市は、スポーツキャンプ地となっており、プロ野球の広島東洋カープと埼玉西武ライオンズのキャンプが、毎年 2 月と 11 月に行われ、平成 21 年の見学者がそれぞれ 7 万 9 千人、1 万人となっている。更に、Jリーグ湘南ベルマーレと横浜 F C のキャンプも 1 月下旬から 2 月中旬に行われ、同年の見学者が 4,350 人（いずれも上記観光客数には含まない。）となっている。

■ 観光客数の推移 ■



【資料】日南市観光動向調査
※H17は、旧日南市、旧北郷町、旧南郷町の合算値
※宿泊率は、平成21年から調査開始

2) 主な観光資源

① 日南海岸国定公園

波光きらめく真っ青な海の続く日南海岸は、別名「日南フェニックスロード」とも呼ばれ、波打ち際には、砂岩と泥岩の重なる層が長年に渡って波に削られ、洗濯板のように見える「鬼の洗濯板」が点在し、県内屈指のドライブルートとなっており、多くの観光スポットが点在している。

年間 100 万人を超える観光客が訪れる「鵜戸神宮」、世界で唯一復刻を許可された 7 体のモアイ像のある「サンメッセ日南」など、多くの観光客で賑わっている。

また、夏になると、日本の快水浴場 100 選（環境省）に選定された富士海



▲ 鬼の洗濯板



▲ 鵜戸神宮

水浴場、大堂津海水浴場及び栄松海水浴場の計3つの海水浴場が開設され、多くの海水浴客で賑わう。平成21年の利用者総数は、約4万9千人となっている。

そのほか、日向灘が一望できるキャンプ場などを備えた「猪崎鼻公園」、南洋植物が茂る森や珍しい亜熱帯植物の花木や果実が栽培され、多くの家族連れが訪れるトロピカルドームを有する「宮崎県亜熱帯作物支場・有用植物園」、船底から海中を見ることができる「マリンビューワーなんごう」など、数多くの観光スポットが点在している。



▲サンメッセ日南



▲富士海水浴場

② 飢肥城趾

飢肥は、天正16年(1588)から明治初期までの280年間、飢肥藩・伊東氏5万1千石の城下町として栄えたところで、武家屋敷を象徴する門構え、風情ある石垣、漆喰塀が残る町並みは、昭和52年、九州で初めて国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

また、飢肥は、住民自らが観光客に「おもてなしの心」をもって接するボランティア等の団体の活動が活発で、そのような活動が高く評価され、第13回優秀観光地づくり賞金賞(日本観光協会)や第20回岩切章太郎賞(宮崎市)を受賞している。



▲武家屋敷通(横馬場)



▲ボランティアの人力車

③ 北郷温泉郷

昭和50年代から温泉の開発を進め地下800mから湧き出る豊富な湯量と良好な泉質を誇る51℃の天然温泉となっており、4軒のホテル・旅館がある。泉質は、疲労回復効果があるナトリウム温泉で、美人湯として名高く、平成21年の利用者数は約11万人となっている。



▲ホテルジェイズ日南

④ 油津港と堀川運河

油津港は、江戸～昭和時代にかけて、特産品である飫肥杉の積出港として、昭和初期には東洋一のマグロ漁港として繁栄した。堀川運河は、飫肥杉を上流から運ぶため、江戸時代に開削され、運河の周辺には、油津赤レンガ館、杉村金物本店、堀川橋、京屋酒造本店など、当時の賑わいを伝える建造物が、数多く残っている。

堀川運河を象徴する風景に、「弁甲筏流し」がある。これは、伐採した杉丸太を筏に組み、小型動力船で油津港まで曳いた運搬方法で、こうして堀川運河を下った飫肥杉が油津港で船に積み込まれ、全国へと運ばれていった。現在では、この運搬方法は途絶えたが、本市の伝統的な運搬技法であるとともに、堀川運河の風物詩として、年数回再現されている。



▲油津港



▲弁甲筏流し再現(堀川運河)

⑤ 道の駅、港の駅

豊かな海と緑の山々に囲まれた本市の産品を使った食材やおみやげ品を販売する道の駅(道の駅なんごう、道の駅酒谷)や港の駅がある。特に、「港の駅めいつ」では、地どれの新鮮なカツオ・マグロなどの魚を使った料理が安価な料金で楽しむことから、土日には多くの食事客が訪れる。



▲港の駅めいつ

⑥ スポーツキャンプ

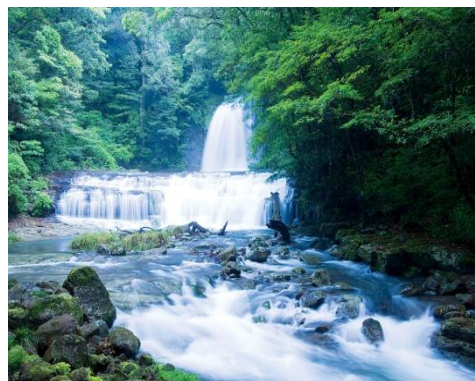
本市は、その温暖な気候から、広島東洋カープ、埼玉西武ライオンズ及び横浜ＦＣ、湘南ベルマーレ等のプロスポーツ団体をはじめ、多くのスポーツ団体がキャンプを行っている。特に、プロ野球については、毎年２月・１１月にキャンプが行われ、多くの見学者が訪れ、また、選手と住民も少年野球教室等を通じて交流が図られている。



▲野球教室（広島カープ）

⑦ 癒しの山々と森林

本市面積の約78%を森林が占めており、その中でも北郷地区は、平成20年に「森林セラピー基地」の認定を受けている。その中にある「猪八重溪谷」は、森林浴によるリラククス効果、血圧の低下や免疫力の向上など、科学的データを元に、心身を癒す効果が実証されており、道沿いには大小20もの滝があることから、ウォーキングを楽しむ多くの人で賑わっている。



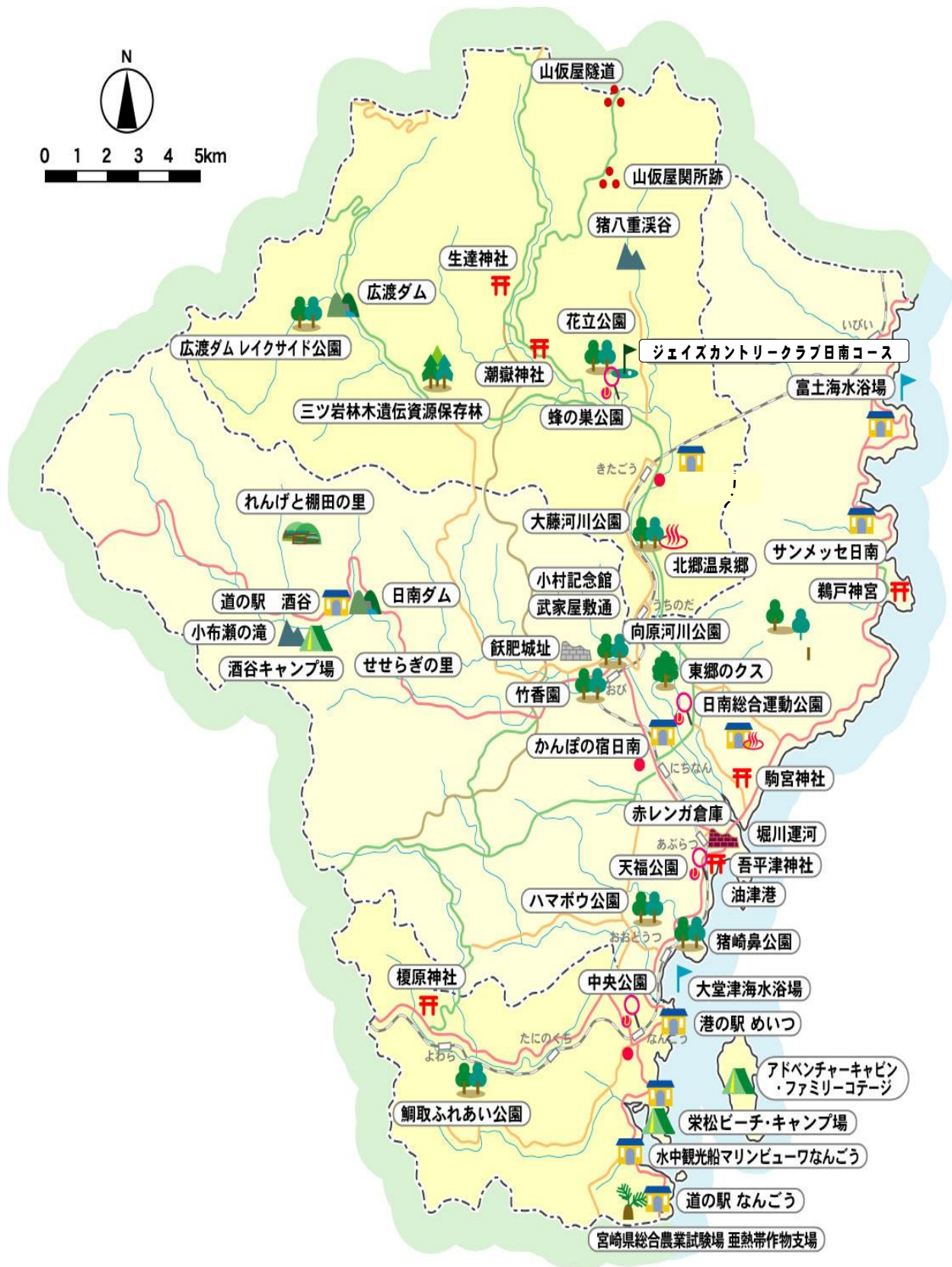
▲猪八重溪谷

また、酒谷地区には、日本の棚田百選に選定された「坂元棚田」がある。現在でも、地元農家が耕作を続けており、同時に、棚田の保全を図るため「棚田オーナー制度」を導入し、市民はもとより市外の方にも加入してもらい、田植えや稲刈りなどの体験のできる観光交流資源として、活用されている。



▲坂元棚田

観光資源の位置図



(7) 歴史

1) 日南市の歴史

本市は、平安時代の「倭名類聚抄」で、宮崎郡飫肥郷と記されており、早い時期から「飫肥」と呼ばれていた。

中世における「飫肥」の油津は、南九州を代表する港の一つとして、琉球を通じた東アジア全体との交易を行っていた。その利権を狙う伊東氏は、この地を支配していた島津氏と長年にわたって戦を繰り返していた。その後、伊東祐兵は、秀吉に仕え、天正 17 年（1587）の島津氏に対する九州出兵で案内役を務めた功績により、飫肥の地を与えられた。その後、江戸時代を通じて伊東家が飫肥藩（現在の日南市と宮崎市南部）を約 280 年にわたり治めた。

飫肥藩の石高は 5 万 1 千石であったが、藩財政立直しの施策として、江戸時代後期から本格的に飫肥杉の造林事業に取り組んだ。飫肥杉は造船材として優れており、西日本の木造船の多くで飫肥杉が使用されていたことから、飫肥杉を安全に油津港へ運搬するため、貞享 3 年（1686）に開削された堀川運河が役立った。

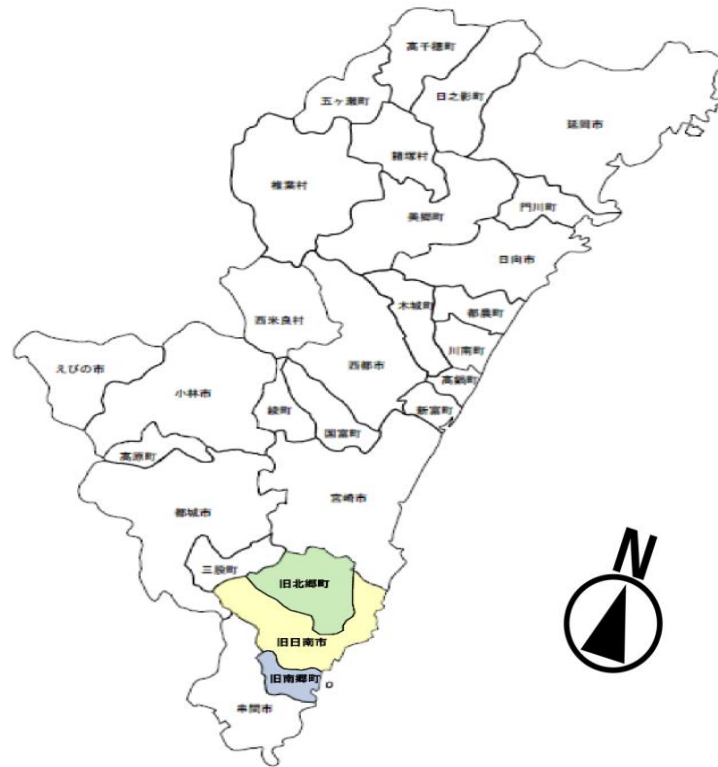
明治 22 年 7 月 1 日に町制施行した油津は、堀川運河沿いが飫肥杉の集積場となって発展した。また、大正 6 年に九州で唯一の漁港指定を受けて整備された油津港は、昭和初期には東洋一のマグロの水揚げを誇り、飫肥杉とマグロの取引で全国各地から人が集まり、油津の町は県内で最も活気ある町として栄え、現在の中心市街地の骨格が形成された。

昭和 13 年（1938）日本パルプ飫肥工場（現王子製紙（株）日南工場）の操業が開始され、また、昭和 38 年には国鉄日南線（現ＪＲ日南線・南宮崎～志布志間）が全線開通し、更に昭和 49 年（1974）からは大油津港計画が策定されて、本市は、県南の拠点都市として発展した。

なお、現在に至る市町村合併の経緯は、昭和 25 年に、吾田町、油津町、飫肥町及び東郷村が合併して市制（旧日南市）を施行した。旧北郷町は、昭和 34 年、旧南郷町は、昭和 15 年に町制を施行し、その後旧南郷町は、昭和 31 年に分村した榎原村の一部を合併した。

平成 21 年 3 月 30 日には、旧日南市、旧北郷町及び旧南郷町の旧 3 市町が合併し、現在の「日南市」が誕生した。

■旧3市町の宮崎県市町村位置図■



2) 主要3地区（油津・飢肥・吾田）の成り立ち

① 人口の推移

旧日南市における主要3地区の人口の推移を見ると、城下町・飢肥は、廃藩置県後に南那珂郡の役所が置かれ、大正末期に郡制が廃止されるまで、南那珂郡の政治・経済・教育・文化・交通の中心地としての役割を果たしていたことから、3地区の中で最も人口の多い地区であった。

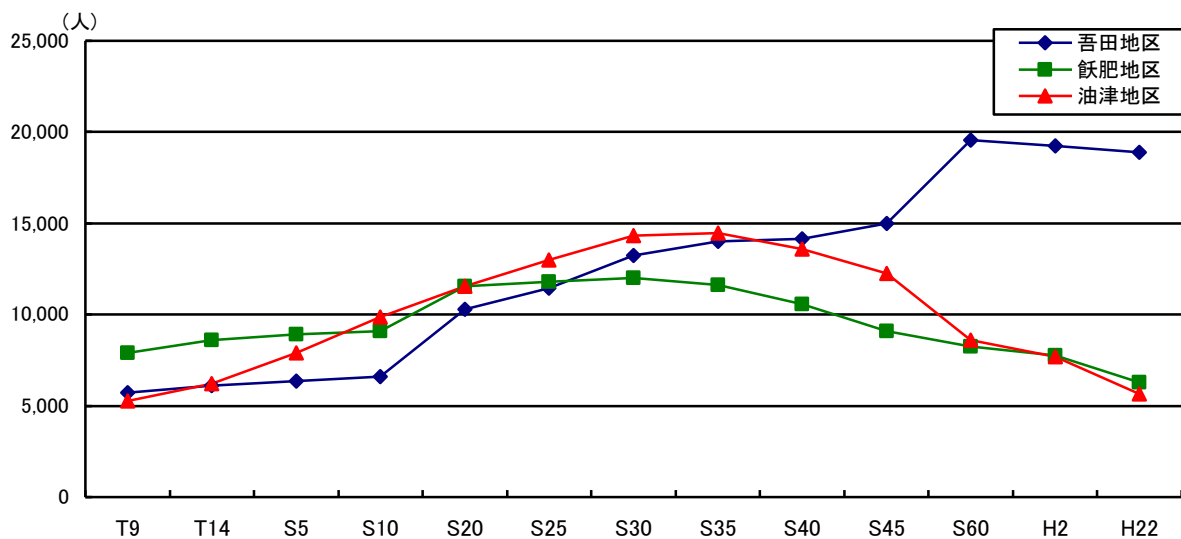
油津地区は、江戸時代から昭和初期にかけて、飢肥杉の取引が盛んであったことから、商業地帯が自然発生的に展開するとともに、社会基盤の整備が先進的に進められ、人口が増加していった。昭和初期にマグロの水揚げが急増し、飢肥杉とマグロで空前の活況を呈したことから、市街地が急速に拡大し、昭和10年には飢肥地区の人口を抜き、最も人口が多い地区となった。

吾田地区は飢肥藩の穀倉地帯で、農村地帯であったが、昭和13年に日本パルプ工業(株)飢肥工場（現在の王子製紙(株)日南工場）が吾田地区で操業を開始したことから急激に人口が増加し、また、昭和25年1月の3町1村合併による旧日南市制施行により、市庁舎が吾田地区に置かれたことなどから更に人口が増加し、昭和40年には油津地区の人口を超え、今でも本市で最も人口の多い地区となっている。

■ 地区別の人口数の推移 ■

(単位:人)

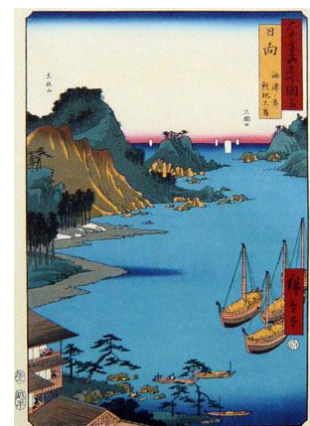
	吾田地区	飢肥地区	油津地区	備考
大正9年	5,714	7,906	5,257	
大正14年	6,118	8,595	6,221	
昭和5年	6,339	8,935	7,883	
昭和10年	6,594	9,099	9,871	油津が飢肥を超える
昭和20年	10,286	11,558	11,558	
昭和25年	11,460	11,811	12,987	日南市制施行
昭和30年	13,232	11,996	14,311	市全体・飢肥地区の人口ピーク
昭和35年	14,002	11,615	14,475	油津地区の人口ピーク
昭和40年	14,165	10,582	13,603	吾田が油津を超える
昭和45年	14,979	9,093	12,240	
昭和60年	19,571	8,243	8,613	吾田地区の人口ピーク
平成2年	19,229	7,749	7,686	油津が飢肥を下回る
平成22年	18,904	6,272	5,641	



② 都市形成の推移

ア. 油津地区

江戸時代の油津地区は、木材資源に恵まれた飢肥藩の木材積出し港として油津港が活用され、大消費地である大阪への木材や海山産物の国内海運を盛んにするとともに、日向灘を行き来する大阪航路も定着し、藩財政を潤す地域であった。また、この航路を通じて油津に播磨・堺などの先進文化圏との交流も深まり、油津に堀川文化と呼ぶべき個性あふれる文



▲歌川広重

「日向 油津ノ湊 飢肥大崎」

化が生まれ、漁業と商業で栄えることになる港町油津の基礎が形成された。

明治 15 年に、大阪商船が大阪～鹿児島間に航路を開設して、宮崎県では油津港のみに寄港するようになり、明治 22 年には、これまで属していた平野村から独立して、3 地区の中で最初に町制を施行した。

明治 41 年には、油津の有力者、渡邊与七により大阪商船の荷客取引店が引き継がれ、魎肥杉の取引をはじめとする商用で西日本各地から船便を利用する人が油津に集まった。これらの人は、幾日か毎にしかない船便を待つために宿泊を余儀なくされ、そのため堀川橋から堀川沿いに旅館が並び、また、近くには警察署もでき、雑貨商や食堂、銀行や呉服店、唐津屋などの商業地帯が、自然発生的に展開した。

大正 2 年には、宮崎県で初めての軽便鉄道が魎肥～油津間に開通し、大正 6 年には、農商務省から指定を受けた国内 7 ヶ所の漁港整備のうち、油津港は九州で唯一指定を受けて整備され、大正 10 年には、宮崎県で初めてとなる上水道（油津町営上水道）が敷設されるなど、市内でも先進的に社会基盤整備が進んだ。

昭和に入ると、昭和 4 年からは、マグロの水揚げが急増し、「東洋一のマグロ基地」と呼ばれるようになり、魎肥杉とマグロで空前の活況を呈して、市街地が急速に拡大し、三間通りや岩崎商店街も形成された。



▲マグロの水揚げ（油津港）【昭和 10 年頃】

戦後、油津地区は、戦災復興事業としていち早く区画整理事業が始められるとともに、都市計画道路の整備も進められるなど、市内で最も早く都市計画による市街地が整備された。

また、昭和 22 年に日南商工会議所が設立し、昭和 25 年の市制施行（3 町 1 村合併）を挟んで、昭和 26 年に日南郵便局、昭和 28 年に宮崎県立日南病院、昭和 29 年に油津公民館といった公共公益施設が整備された。更に、昭和 37 年に天福球場が整備されると、翌 38 年には、広島東洋カープのキャンプに利用されるようになった。

商業に関しては、昭和 36 年に港百貨店（現(株)日南山形屋）が立地すると、昭和 40 年には、当時としては珍しい近代的な商店街アーケードの建設や道路舗装等の整備も進められ、昭和 47 年に寿屋、昭和 62 年にマルショクが立地するなど、商店・スーパー等の商業施設の集積が進ん



▲繁栄期の油津商店街
【昭和 40 年代】

だ。昭和58年における3つの商店街（銀天街、五番街、岩崎1丁目商店街）の市内における販売シェアは（寿屋、日南山形屋などの大型店を除く）、21.1%^{※1}を占め、県南地域経済や本市商業の中心地として賑わった。

平成に入ると、平成7年に中心市街地内にサピアが開店し、テナントとして寿屋と地元商店が入店した。

また、商店街もサピアの出店に併せる形で、アーケードのリニューアルを行った。しかし、平成10年に商店街の核店舗であったマルショクが商店街から退店し、また、平成14年にはサピアの核店舗であった寿屋が、民事再生法の適用を申請して閉店すると、それに併せるかのように商店街の店舗も次々とシャッターを閉めていった。

これらの背景には、核店舗の撤退もさることながら、モータリゼーションの進展により、平成5年に開通した吾田地区から飢肥地区に通じる「市道楠原平野線」などの幹線道路沿いに大型家電店、ドラッグストア、衣料品店などのロードサイド型店舗が立地するとともに、病院・診療所や住宅が急速に建ち始めたことや、近隣都市への大型ショッピングセンターの立地もあり、消費が地区外へ流出がしつづけていることも挙げられる。

このような都市形成の背景の中で、油津地区繁栄の象徴である堀川運河は、昭和40年代になると家庭污水で汚染され、昭和51年に策定された油津港湾計画で埋め立てが計画され、一部が埋め立てられて緑地公園とされた。

しかし、昭和59年に下水終末処理場が完成し、下水道の普及により水質の改善が進むと、市民の間で堀川運河の歴史的価値が再認識されて保存運動が展開され、その結果、平成6年に油津港湾計画が改定されて、堀川運河保全に向けて方針転換が図られた。

また、平成10年には、堀川運河周辺の歴史的資産が国の登録有形文化財に指定され、堀川運河の保全整備と併せて、本市の歴史を物語る新しい観光地としてのポテンシャルを有するようになった。



▲空き店舗が増えた油津商店街
【平成15年頃】



▲S39頃の堀川運河支流
(奥は曙橋)



▲現在の堀川運河(奥は堀川橋)

イ. 飫肥地区

江戸時代は、伊東家五万一千石の城下町であり、廃藩置県後は南那珂郡の役所が置かれた。

明治33年に町制を施行し、大正末期に南那珂郡制が廃止されるまでの間、民間の各種銀行、組合などをはじめ、国・県・南那珂郡の官公署が集中し、南那珂郡の政治・経済・文化・教育・交通の中心地としての役割を果たしていた。

商業に関しては、明治・大正期には既に17店舗が営業を開始しているなど、早くから商店街を形成していた。

昭和25年の市制施行後、市庁舎が吾田に設置され、加えて吾田への居住が進んだことから、昭和58年の飫肥商店街の日南市内における販売シェアは6.5%^{※1}と、市内における商業地としての位置付けは低い近隣型商店街^{※2}であった。

昭和50年代に入ると、日南海岸を訪れる観光客を更に市内に呼び込むための飫肥城復元事業に着手し、昭和52年には九州で初めて伝統的建造物群保存地区に選定され、街並みの保存整備が進められた。

平成16年にNHK連続テレビ小説「わかば」のロケ地となったことから知名度が高まり、年間約20万人の観光客が訪れるようになった。しかし、観光客の訪れる飫肥城周辺と飫肥商店街が離れていたため、観光客が商店街まで足を延ばすことがなかったが、近年取組が始まった「食べあるき・町あるき」事業により、商店街にも観光客が訪れるようになると、空き店舗も少しずつ解消され、賑わいを取り戻しつつある。



▲ 飫肥商店街【昭和40年頃】



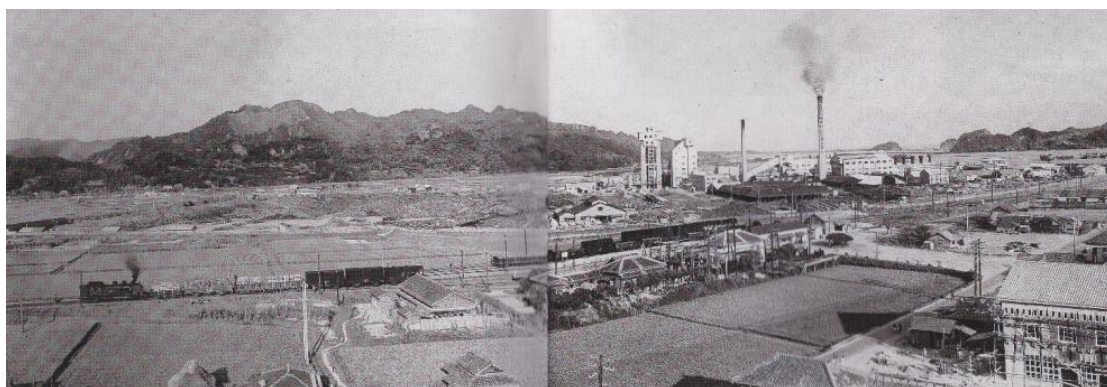
▲ 「食べあるき・町あるき」の光景

ウ. 吾田地区

江戸時代は、飫肥藩城附地西筋に属し、星倉・戸高・西弁分・隈谷・平野の五つの村からなる飫肥藩の穀倉地帯であり、明治22年には、この五つの村が合併し、吾田村となった。

明治から大正・昭和初期の吾田村は、米作を中心とした農業生産地域であった。

昭和13年に日本パルプ工業(株)飫肥工場（現王子製紙(株)日南工場）が操業を開始すると、これまで農業中心であった地域から工業地域への転換が図られ、これに併せて人口も増加して、昭和23年には町制を施行した。



▲日本パルプ工業日南工場（現王子製紙日南工場）と志布志線吾田駅（現 JR 日南線日南駅）
【昭和 25 年】

昭和 25 年の旧日南市制施行時の吾田町の人口は 1 万人強、戸数 2,167 戸で、その半数に当たる 1,012 戸は農業に従事していた。

米・麦の生産額は、合併した 4 町村で最も高く、依然として農業の盛んな地域であったが、日本パルプ工業(株)飼肥工場の操業により、工業地域として経済力が格段に成長して、吾田町の総生産額の 97%を工産物が占めるようになり、企業城下町として街が発展する礎となった。



▲日南市役所庁舎【昭和 31 年】

古くからの城下町飼肥と、貿易や漁業で栄え、商店街を有し市の中心商業地であった港町油津というふたつの個性的な町の間にあった吾田地区は、日本パルプ工業(株)飼肥工場の設立により、単なる田園地帯から工業振興都市への変貌をとげ、更に、市町合併によって市庁舎が置かれたことで、日南市の行政の中心としての顔を持つ街へと変化していった。

一方、商業機能は、明治・大正期には 2 店舗しかない地区であったが、昭和 29 年に日南駅から飼肥に向かう国道 222 号沿いに中央商店街が発足すると、昭和 30 年までに 17 店舗が開業した。

その後、昭和 50 年までに 34 店舗が開業したが、商店街としての歴史は浅く^{※1}、また、近隣型商店街であったために、昭和 58 年の市内における販売シェアは 5.7%と、商業地としての位置付けは低く、吸引力はあまり強くなかった。



▲中央商店街【平成元年頃】
（左端は旧日南信用金庫本店）



▲平成 23 年現在の同地点

中央商店街は、昭和の終わりにから平成初期頃に大型ショッピングセンター進出の申入れがあったため、自らの店舗を移動させるなどして一団の土地を準備したものの、バブル経済の崩壊とともに大型ショッピングセンターの進出が断念されたこともあり、数年後には解散し、吾田地区から商店街が消滅した。

しかし、平成5年に吾田地区から飢肥地区に通じる「市道楠原平野線」が開通すると、モータリゼーションの進展も相まって、この市道沿いにスーパー、大型家電店、ドラッグストア、衣料品店などの郊外型店舗が立地するとともに、病院・診療所や住宅が急速に建ち始めた。また、国道や県道などの幹線道路沿いにもドラッグストアや地元大型スーパーの立地が進み、これに併せるかのように市民の買物も、商店街の小売店からロードサイド型店舗へとシフトしていった。



▲開通時の市道楠原平野線（H5）



▲平成 23 年の市道楠原平野線

（※ 1）日南地域商業近代化地域計画報告書（昭和 59 年 3 月）より抜粋

（※ 2）近隣の住民や通勤・通学者が主たる顧客である商店街

③ 各地区の街の特性

都市形成の推移で記載したとおり、本市の街の形成は、昭和 25 年の旧日南市施行を境に大きく変貌を遂げ、現在に至っているという他都市には見られない特殊性がある。

本市の街の形成が、このような特殊性を有していることを考慮し、それぞれの地区の特性を、以下のとおり整理する。

ア．油津地区

本市経済の中心として、車の利用が少ない時代から街が形成されてきたため、公共交通機関が地区中央部を通っていることに加え、公共公益施設や店舗、医療機関などの生活に身近な施設が近接して立地し、立地密度も市内で最も高いことから、高齢社会に対応したコンパクトシティとしての役割を担う。

また、県南地区唯一の百貨店である「日南山形屋」や市内唯一のアーケード商店街が近接し、歴史的にも本市商業の中心地を形成していたことに加え、県南地区最大の売場面積を持つ「サピア」も近接して立地していることから、娯楽的な街の魅力や人の回遊による地域の賑わいを形成する役割も担っている。

更に、本市の主要観光地である「鵜戸神宮」と「飫肥」の中間点に位置し、また、観光資源として活用できる歴史的資産を数多く有するとともに、多くの宿泊施設や歓楽街を有していることから、今後、本市を訪れる観光の滞在時間を延ばし、本市経済を向上させるポテンシャルを有している。

イ．飫肥地区

本市で観光客の最も多い鵜戸神宮と並び、飫肥城址を中心に、伝統的建造物を活用した本市観光の中心地で、「飫肥」という全国に名高い地名をもって、本市観光の魅力を発信し、観光客を本市へ誘導する役割を担っている。

ウ．吾田地区

市庁舎をはじめ、国や県の出先機関が立地し、行政機能の中心地で、人口が最も多く、また、店舗や医療機関などの生活に身近な施設の立地件数も多いなど、地域住民を中心とした日常生活の利便性が高い。

しかしながら、店舗や医療機関などは、モータリゼーションの進展に伴って、平成初期から立地が進んだものであるため、車での利用を前提としており、それぞれの施設が広範囲にわたって分散立地している。

(8) 本市における上位計画【日南市総合計画】

1) 市の将来像

本市が有する美しい自然環境に加え、価値ある豊かな歴史、温暖な気候、おおらかで人情味のある人柄というまちづくりの魅力的な要素の有効活用を進め、それらの情報発信を図りながら、黒潮が育んできた文化交流を生かして魅力ある地域づくりを進める。

そこで、本市の将来像を「緑と黒潮が育む産業・文化・交流都市」として、他にない魅力を持ったまちに人々が集まり「生まれてよかった、住んでよかった。また来たい、住んでみたい、住み続けたい。」と実感できる活気あふれるまちづくりに取り組む。

2) 主なまちづくりの方向性

① 人口の確保

第1次産業や地場産業の活性化と後継者の育成、企業誘致による就業機会の拡大と雇用の確保に努めるとともに、基盤整備の推進や教育・医療・福祉の充実などによる定住促進に取り組む。特に、本市の恵まれた自然環境などを背景として、東九州自動車道の開通メリットである移動時間の短縮を生かし、近隣都市との職住接近（ベッタウン）に向けた施策を実行する。

② 飫肥杉を核としたまちづくり

地域のかげがえのない資源である飫肥杉の歴史や特徴を、市民一人ひとりに啓発し、市の木「飫肥杉」を市内一円で活用し、景観・まちづくりに努める。

③ 賑わいのある商店街づくり

油津の商業地を中心としたエリアを中心市街地として位置付け、地域の歴史・文化を生かしたまちづくり事業の積極的な活用を図り、散策道路、公園及びポケットパークなどの環境整備を促進し、定住人口の維持・増加を図るとともに、快適でにぎわいのある商業空間を創出し、大都市の商店街や大型店との違いの明確化を図る。

④ 歴史的資産の活用

飫肥城下町や油津、坂元棚田、鵜戸神宮など、歴史的風致の優れた地区について、核となる文化財とその周辺環境を保存し、まちづくりに活用する。

油津の歴史的街並みと堀川運河については、市民と行政の協働により、歴史的景観を生かしたにぎわいや活力のあるまちづくりを推進する。